

私たちの NPO は新たな門出をしました！

—21 世紀のミュージアム基本構想を抱いて—

理事長 天岸祥光

私たちが目指してきた「自然史博物館」は、静岡県立「ふじのくに地球環境史ミュージアム」という形でこの4月に実現しました。

私たち NPO は新ミュージアムの協力者として、いわば細胞の中のミトコンドリア的存在として、新たに出発することになりました。この新ミュージアムに活力とエネルギーを供給していく存在になりたいと思っています。もちろんミュージアムの主役は6名の研究員（現在はまだ5名）の方々ですから、その強力なサポーターとしての位置づけをしっかりとわきまえた上での話ですが、NPO が中心に入り込んだ形は全国的にも珍しく、かつこのミュージアムの最大の特徴でもあります。そこで、この4月の総会で NPO の定款の3条を一部改定して「・・・県立博物館「ふじのくに地球環境史ミュージアム」の運営に協力し・・・」の文言を入れることを承認していただきました。

この全国的に何周も遅れてしまった静岡県の「自然史博物館」をどう捉え、どう創造していくべきかを考えるに当たって、私たち NPO の希望がなくなって、平成25年度に外部有識者による「基本構想検討委員会」が県によって設置されました。今年4月初代館長になられた安田喜憲先生を委員長に10名のメンバーがそれに参加しました。NPO からは柴正博理事と私が参加しました。結論から言いますと、私たちが期待した以上の内容の答申を川勝知事に提出できたと私は思っています。

新ミュージアムをこの答申に従っていかに構築していくかはこれからです。そこでこの委員会での検討内容、結論等をもう一度振り返ってみたいと思いますが、その前に、私が当初から懸念していたことをまず述べます。それは NHK クローズアップ現代（平成23年）で放映されたショッキングな報道です。その内容は、日本の文化を支えてきた全国に散らばっている各種博物館が次々と閉館に追い込まれている、という内容でした。その原因は、①バブル崩壊後の財政難、②人が博物館に来なくなった、「分かる人だけが来ればいい」という時代は終わった（専門家の自己満足では、博物館はもはや維持できない）、というものでした。博物館の基本理念・構

造は維持しつつ、新しい観点に立った21世紀の「新しい博物館」の構想が必要であるというのが NHK の結論でした。

そんなことを頭に置いて私は基本構想委員会に臨みましたが、幸いにも委員会では新しい観点に立った、これからの新しい博物館構想が熱く語られ、私の懸念はすぐに杞憂であったことが判明しました。

「博物館」は「科学館」などと異なり、一般人には見えない調査、収集、研究などに重点を置きますが、だからと言って「展示」を軽視するわけにはいきません。委員会メンバーの小川義和氏（国立科学博物館）と洪恒夫氏（東京大総合研究博物館）はそれぞれの立場と経験から、これからの博物館の「展示」について、「従来のように集めた資源（資料）をただ並べて見せるのではなく、再資源化して現代の問題点を浮かび上がらせ、未来を見据えた情報を世界に発信していくことこそ、21世紀の新しい博物館のあるべき姿である」と述べ、私たちを感動させました。この思いは当然答申に盛り込まれることになりましたが、この高い思いに、6人の研究員を中心にどれだけ応えていけるかが、これからの中心的な課題になるでしょう。

さらに、私たちの目指す博物館は、自然科学の教養と知識、さらに活用能力を涵養する生涯学習の拠点となり、地球規模のグローバルな視点で自然とそれに連動した歴史伝統文化を将来に継承していく人材の育成を目指すこととしました。そのために、バックヤード業務の一部公開や、体験型講座など世代に応じた探求と発見を誘うサイエンスコミュニケーションの創造を通じての学習拠点の推進を図ることなどが答申に謳われています。その一環として、県内小学校などへの出張博物館（ミュージアムキャラバン）も計画され、さっそく地元の大谷小学校を皮切りにまもなくキャラバン隊が出発します。

答申に沿ったこれらの活動に私たちはこれまでの経験を活かしながら全面的に協力していく所存ですので、皆様のますますのご支援、ご協力をお願いします。